☆世界同時革命・世界革命戦争
世界プロレタリア独裁
共産主義勝利！
共産主義者同盟

4月25日
第26号
編集発行人　南　安明
一部　30円
購読料　半年　600円（〒共）
1年1,200円（〃）

蜂起

蜂起社
発行所　蜂起社
渋谷区広尾5の16の1
北村第一ビル内
TEL 03（446）0832
（振替）東京 1512

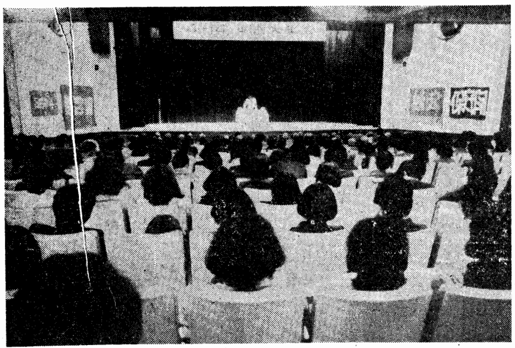
4・28■沖縄派兵阻止・蜂起・世界革命戦争勝利中央総決起集会（4・28実行委主催／1時礫川公園）
5・9■精神医療を考える討論集会（家庭クラブ5時半）
5・15■沖縄返還式典粉砕派兵直撃中央総決起集会（1時清水谷公園）

南ベトナム解放戦線・北ベトナム軍の総反攻と連帯し

5−15記念式典粉砕・派兵前段直撃へ進撃せよ

4・14集会の圧倒的成果踏まえ
4、6月闘争の爆発的高揚を！

全国の革命的同志諸君！蜂起購読者諸君！わが蜂起派は、四・一四集会の圧倒的な成功にふまえ、いままさに4・28−5・15自衛隊沖縄派兵前段直接攻撃・「返還」式典粉砕大闘争へ向けて進撃している。敵権力の狂乱の反革命を共産主義政治によって包囲し、その成果と結合させつつ、敵権力の重心たる帝国主義軍隊＝自衛隊を、その海外派兵への一歩ー沖縄派兵の前段において、またその派兵の過程において、先進国武装闘争の刃で突き刺さねばならない。そして、五月一五日が、日帝の沖縄に対する軍事支配の開始の日であり、そのことが日帝にとって、米中ソ三角核均衡にコミットしつつ、同時に独自の侵略反革命を東南アジア全域に向けて貫徹していくための一歩であり、そのために軍を中心として本土の諸階級、諸階層をも再編していく過程としてもあること、その一環としてすでに刑法改正ー保安処分が準備されていることをみるならば、われわれは、全力をもって5・15式典粉砕を闘い抜かねばならない。すべての革命的同志、労働者、学生諸君！蜂起派と共に進撃せよ！



4・14東京大集会　九段会館は労農学900名を集め立錐の余地のない程になった　（詳細2面に！）

ベトナム人民の総反攻と米帝の北爆再開

三月三〇日開始された、北ベトナム正規軍、南ベトナム民族解放戦線ならびにすべてのインシドナ武装解放勢力による大攻勢は、開始以来一ケ月を迎え、ますます強化されている。攻勢は、いまや南ベトナムにとどまらず、カンボジアにおいても強化され、カンボジアから南ベトナムのサイゴンへ向けて突き出している「オームのくちばし」地区は、ほぼその全体が解放戦線の支配下におかれている。

また、これまで「聖域」にいるかのごとく振舞い、南北ベトナムに対する空爆や艦隊射撃を欲しいままにしてきた米第七艦隊に対しても、ミグ戦闘爆撃機による爆撃や砲撃が展開され四月九日以来すでに旗艦オクラホマシティー以下数隻が、炎上・大破している。

南ベトナムでは、南ベトナム解放戦線・北ベトナム軍の攻勢は、三月三〇日一七度線非武装地帯附付で開始されたが、この北六地区へ南ベトナムカイライ政府軍が吸い寄せられている間に、中部高原地帯、サイゴン西北のアンロクを中心とし国道十三号線に沿う地域メコンデルタ、においても攻勢が開始され、戦争はこの四つの戦線を基軸としつつ、文字通り南ベトナム全土に拡大している。

六八年テト攻勢以来といわれる今回の大攻勢は、しかしテト攻勢とはその質を異にしている。テト攻勢が解放戦線ゲリラ部隊の蜂起を中軸としたのに対して、今回の攻勢は正規軍戦を主とし、それを補完する形でゲリラ戦が位置づけられている。そして、その正規軍戦も朝鮮戦争型のそれではなく、集中と散開を繰り返すゲリラ戦の発展としてのそれである。ブルジョア・ジャーナリズムは、今回の攻勢が解放戦線によるそれではなく、すべて北ベトナム正規軍によるそれであるかのように言っている。しかし、南カイライ政権の平定化計画にもかかわらず、解放戦線はその力を強化し、T54型戦車や一三〇ミリ砲などの近代兵器の訓練をさえ行なっていたと考えるべきなのである。そうでなければ、このように全土一体となった攻勢は展開できなかったであろう。もちろん、北と解放戦線を区別し、北ベトナムの"侵略"を批難し、南ベトナム解放戦の攻勢を賞賛しベトナム人民の闘いを、できるかぎり民族主義の枠の内にあるかのように主張する意見（例えば、「朝日ジャーナル」4月28日号、丸山論文）は論外である。疑いもなく、インドシナ全土は単一の戦場を形成しており、革命と反革命は、ともに一貫した戦略に導かれて闘っているのであり、革命の側においてその一体化がより深められていることは、北ベトナム労働党が民族共産主義の党であるとしても、その出発がインドシナ共産党であることを考えれば、当然であろう。そして、むしろ、インドシナにおける単一の革命軍の形成を、現実の戦場からの要請からだけではなく、単一党の形成から、目的意識的に追求していくことこそが、なされねばならないといえる。

しかし、こうした「民族解放ー社会主義」をスローガンとする戦いの持っている限界性にもかかわらず、われわれは、このベトナム人民の、いやインドシナ人民の過渡的革命戦争を断固として支持しなければならない。そしてその戦いの限界性を止揚する戦いを、世界プロ独樹立の旗のもと、先進国プロレタリアートの、後進国過渡的革命戦争を戦っている被抑圧人民に対する質の連帯として、先進国武装闘争として戦い抜かねばならない。なぜなら第一にわれわれ現代の先進国プロ独派は、このベトナム革命戦争との関係をぬきに自己の過渡期世界の階級闘争における位置を確定しえないほど、ベトナム革命戦争と結合しているからであり、このことは、いいかえるならば、われわれだけがこの過渡的革命戦争を止揚し得る位置にあるということである。さらにいえば、わがブントが過渡期世界論を対象化し得たのは、まさしくベトナム革命戦争の高揚と、それに対する対応能力を全世界の既成左翼とりわけスターリニスト党が喪失した段階で、このベトナム人民の戦いへの連帯をバネとして、過渡期世界の自然発生性を最も純粋に自己に表現させつつ登場し、現代先進国プロ独派潮流のなかに自己を意識的にも位置づけ、その国際階級闘争の到達地平から逆にマルクス・レーニン主義を武器としてこれまでの階級闘争を把え返すという作業ができたからである。

その故にこそ、わがブントの過渡期世界論は、マルクスやレーニンの教条的なアテハメによるアレコレの現状解釈でなく、現下の国際階級闘争に対する生きた指針となり得ているのであり、国際主義を最もいきいきと内実化し得ているのである。このことを忘れた、いや自己の実践の貧困から主体化し得ない日向一派が革マルの「帝国主義とスターリン主義の相互依存と相互反発の変種たる「帝国主義とスターリン主義の相互反省」なるマンガに転落していったのはけだし当然である。

これと同じことは、かつてわれわれが「原則的文献解釈主義者」と規定した怒濤派についてもいえる。かれらは、「共産主義革命」においてきわめて真面目に、われわれの主張を批判してくれているのだが、この過渡期世界論の対象化が実践的にも理論的にもなし得ていないが故に、かれらが真面目であればある程、われわれには風車に突進するドン・キホーテのように見えてならないのである。

ベトナム人民の戦いは三角核均衡を突き破る

第二に、ベトナム人民のこの戦いは、米中ソ三角核均衡を突き破るものとしてあることである。

四月六日、ビン・パリ会談臨時革命政府代表は、今回の攻勢の目的が、「ベトナム化を失敗させ、パリでの交渉をもたらすこと」にあると述べている。この表現は、柔らかいが、ベトナム化が国内の反戦気運をも考慮に入れたとき、ニクソンが取り得る最後の路線であること、そしてパリ和平会談のボイコットが米中会談の後米帝から一方的になされたこと、を考えるならば、その決意がどれ程のものか想像されよう。米中、米ソの両会談によってベトナム人民の闘いをジュネーブ協定型の解決、すなわち米中ソ三角核均衡の枠内に集約せんとした米帝と、それに手を貸さんとした中・ソ、特にこの攻勢期間中の四月二日に第三回米中会談を行なない、訪米卓球チームを送り込み、アメリカ国民からさえ皮肉を浴びせられた中国の米中友交外交に対する文字通りの挑戦である。

北ベトナム、南ベトナム解放戦線は、今回の攻勢を一時的な反攻として戦っているのではなく、まさにベトナム革命戦争の最終的決着を射程に収めつつ、「総反攻」として戦っているのである。米帝を戦場でたたきのめし、「敗者」として講和のテーブルに、着かせること、ここにベトナム人民の狙いがある。

そして、戦局もそのように展開している。解放軍はアンロクや北部戦線において、地域を占領することよりも、軍そのものを包囲せん滅することをより重視しているようにみえる。そして、カイライ政府軍の、連隊規模の投降、寝返りがあいついでいる。カイライ軍事政権の重心が軍にあることを計算した戦術である。そして、解放軍の戦車部隊を先頭とした中部高原地域への進出はさらに決定的な大包囲せん滅戦の開始を示唆している。

第三に、アメリカをはじめ全世界にベトナム反戦の波を作りだしていることである。しかし、この反戦闘争の波は、六八年のテト攻勢時をピークとして盛り上がりをみせ、日本においてもそれと連帯する闘いを砂川、二つの羽田、王子、三里塚、防衛庁・新宿として作りだしたあの反戦闘争の波とは異なっている。あの闘いの波が、各帝国主義国における権力性格の先行性ファシズムへの転換とそれによる反革命の軍事の壁の前に敗北したことは、それを突破する先進国武装闘争が、共産主義と軍事を統一し世界プロ独を切り拓くべき世界党ー第五インターの建設と一体として未だ本格的には勝ちとられていないという、われわれの主体の未成熟に規定されている。

同志諸君！ベトナム人民の大攻勢に応え、連帯する唯一の道は、蜂起ー世界革命戦争派に結集し、その持てる力のすべてを先進国武装闘争の本格的段階への押し上げと、第五インター建設に着手することなのだ。

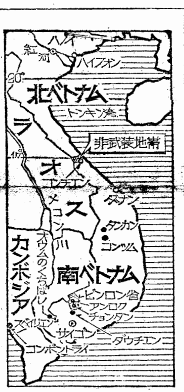
この北ベトナム軍と南ベトナム民族解放戦線の総反攻と、それに恐怖した米帝のハノイ・ハイフォンを始めとする北ベトナム全土への居直り強盗的論理にもとづく北爆に対して、日本の新左翼もそれなりの対応を示している。

しかし、それはいずれも、米中ソ三角核均衡による過渡期世界の階級闘争の反動的固定化に対して総反攻を試みているベトナム人民の戦いの普遍的質に応えるものでも、その方向を指し示すものでもない。

革共同革マル派は、ベトナム人民の戦いの質には一切ふれることなく、日共以下のレベルで「北爆再開反対」を繰り返すばかりであり、中核派も「ハノイ・ハイフォン爆撃弾劾」を見出して主張するだけである。

日向一派も、今回のベトナム人民の反攻の持っている国際的質には目をつぶり、五年遅れのレベルで、日帝の米帝への加担を"批判"しているに止まっている。

革命的同志諸君！蜂起読者諸君！ベトナム人民の総反攻と連帯し、先進帝国主義国において先進国武装闘争・共産主義政治を展開せよ！



「火炎ビン処罰法」成立に抗議する

破弾闘

四月二十四日の参院本会議において「火炎びん の使用 等の処罰法」が全会一致で可決され、五月一四日から施行されることが決定した。

これは、六七年以来のプロ独派の闘いに恐怖した先ファ権力と人民戦線派が文字通り一致協力して成立させたものである。この明々白々な治安立法に人民戦線派が協力したことの責任は大きい。なぜなら権力に対する人民の闘い一般に敵対することを、人民戦線派はこの法律へ賛成することによって表明したからである。人民の権力に対する闘いが暴力を伴わないことがあるとでも思っているのか。

そして日共は、この法案に賛成することによって、自己がもう決して武装闘争をしないことを誓約した。すなわち、革命を実行する意志のないことを約束した。われわれは、この破防法にも批すべき治安立法の成立を断じて許さないし、日本のプロレタリア人民は、そして特に蜂起戦争派は、武装闘争のさらなる深化をもって答えるであろう。

精神医療を
考える討論集会
第2回
とき／5月9日　5時半開場
場所／家庭クラブ
（新宿駅南口下車5分）

日帝の沖縄軍事支配を派兵阻止で粉砕せよ

ベトナム革命戦争のこうした段階への発展のなかで、五月一五日の「沖縄返還」が迎えられようとしている。それは、沖縄を東南アジアへ向けた侵略反革命のキーストーンとして米帝からその施政権を受け取らんとしている日帝の未来を暗示するかのようである。そして、われわれは、式典粉砕闘争と派兵前段直接攻撃闘争によってブルジョアジーとその軍隊に対して、その破産を突きつけてやらねばならない。

五月一五日は、また、沖縄闘争の大きな結節点であり、新たな段階への飛躍を実現せねばならない日である。この日が近づくにつれて、諸党派の沖縄闘争論の破産がますます明らかになり、鉄の戦線1号以来、自衛隊の沖縄派兵とそれに対する本土ー沖縄の闘いこそが沖縄闘争の核心であることを主張してきたわれわれの路線的正当性が明らかになってきている。

戦後、沖縄の大衆闘争は、米軍政に対する闘いとして開始され、その闘いは、「祖国復帰協」の運動へと集中されていった。いいかえるならば、沖縄人民が「祖国復帰」をスローガンとするとき、そのスローガンを支えていたものは何よりも「米帝の軍事支配反対」であったのだ。そして、そこでいわれる「祖国」は現実の帝国主義国家「日本」ではなく、米軍事支配よりもよりましな状態としての「日本」であった。だから日米共同声明が発表され、「復帰」が現実のスケジュールとなるまでは、日本国憲法が、戦後憲法秩序としてではなく、その条文そのものがあたかも日本であるかのように美化され、そこへの復帰であるかのように把えられる傾向が強かった。

だが、反米軍政の意識を、かかる「祖国復帰」へ集約することがブルジョア民族主義であることに変りはないし、共産主義者のすべきことではない。そして、もちろん「日本への復帰」の代りに「沖縄の民族自決」を主張することもまったくのブルジョア民族主義であり、ユートピア主義である。

共産主義者は、どのような支配（権力）とどのように闘い、いかなる未来を切り拓くのか（権力を樹立するのか）を、常に明らかにしていかねばならない。「米軍政打倒」のスローガンが大胆に掲げられねばならなかったのだ。

だが、沖縄における「祖国復帰」は、「本土」における「沖縄返還」や「奪還」に較べれば、米帝の軍事支配に対決する内実をまがりなりにも持っていただけに、はるかにマシであったといえる。本土において「返還」や「奪還」を主調することは、日帝の侵略反革命の後押しをすることであり、日帝の沖縄支配を要求することにほかならないからである。

ここに、復帰協の運動が、五月一五日が近づくにつれて、「自衛隊配備反対、軍用地契約反対、自治権確保」を基調とするそれへと転換してきており、その主軸が自衛隊配備阻止に煮つまりつつあるのに対して、本土の既成左翼社・共が自衛隊の沖縄派兵に一切対応することができずにいることの根拠はここにある。

諸党派の誤りを止揚し派兵前段直撃へ

新左翼で唯一「奪還」を唱えた中核派は、「あり得ない」と思っていた「返還」が日米両帝国主義によって合意に達するや、「ペテン的返還政策粉砕」のスローガンへなしくずし的にスライドさせ、「奪還」の排外主義的誤りを「釣魚台略奪阻止」を言うことによって補完せんとしている。そしてまた、「派兵阻止」をプラグマチックに付け加えてきている。"革共同プロ通派"の面目躍如である。

他方、宮下派は「自決権承認」を主張するフロント、「沖縄の反革命的統合」「帝国主義的反革命的統一」に反対する日向派・青解派と多少のニュアンスの差はあれ「返還粉砕」である。

たしかに、島津藩の支配下においても、沖縄は植民地的収奪を受けていたし、それは明治政府によって沖縄併合として受け継がれていた。しかし、日帝権力と沖縄との関係は日帝が南下を決意したとき、大きくその質を変えたと考えることができる。大平洋戦争における沖縄決戦が示しているように、沖縄は日帝の南下のためのステップであると同時に「本土」（天皇のいる所）を防衛するためには犠牲になるべき「前線」として位置づけられた。そして、それは日帝の敗戦によって、沖縄が米軍支配下におかれ、米帝軍の極東におけるキイストーンとなることによって、その前線としての性格をさらに強めた。

そして、いま日帝はまさにアジアにおける侵略・反革命を強化するために沖縄返還を実現させせようとしている。その結果が、日帝の沖縄に対する軍事支配を意味することは、いまや明らかである。日帝にとって、沖縄はやはりキイストーンであり「前線」なのだ。米中ソ三角核均衡にコミットしつつも、独自の反中反共路線を取ることをアジアにあるというその地理的な位置からも要求されている日帝にとって、沖縄の重要性は決定的である。沖縄を占領地域として支配してきた米帝と支配の様式に違いはあるであろうが、本土と沖縄の差別が埋められることはあり得ないし、それはむしろ拡大さえするだろう。だが、問題はその差別の質が何かということである。

差別一般、民族一般が問題なのではない。すでに明らかにしたように、その差別は日帝が沖縄に与えた軍事的位置によって戦前にも実体的な意味を持っていたし、今後においてもそうである。そうであるとするならば、問題の核心は米軍政に代わる日帝の軍事支配にいかに対決していくかということであり、このことを「奪還」の裏返しとしての「返還粉砕」という観念的なスローガンを揚げることによってアイマイにしてはならないのである。「返還粉砕」は、「奪還」がどんな左翼の目にも日帝の後押しと映るのに対して、一見左翼的であるかのようにみえる。しかし、これまでみてきたように、これはきわめて一国主義的・観念的なスローガンであり、「復帰幻想」に対する即自的、小ブル的反発にすぎない。

また、労共委（怒濤派）にみられるように、これらの主張に「プロレタリア独裁樹立」を対置して、何か自分達が革命的であるかの様に思い込んでいる部分に対しても一言いっておかなければならない。世界プロ独の樹立が民族問題解決、いや人類前史が生み出したあらゆる問題の解決の根本的一歩であることは、常識である。現存するいかなる闘いからそれへ向って進んでいくのか、いかなる権力にどのように党ー階級が闘いを組織していくのかを語らないならば、実は何を語ったことにもなっていないのだ。「返還粉砕」という主張が、小ブル的大衆運動主義の表現であるとするならば、「プロ独」を単純対置する主張はサークル的サロン派マルクス主義の表現である。

革マル派の「米核戦略に従属した5・15沖縄施政権返還ー自衛隊配備粉砕」という主張は、復帰協の「県民無視の返還協定弾劾、自衛隊配備反対」のバリエーションの一つにすぎないので、ここでは改めて批判しないことにしたい。

われわれは、こうした諸党派の民族主義的誤り、一国主義的誤り小ブル的観念論、サロン派的限界を止揚し、昨年10・21闘争における自衛隊直撃の成果を踏まえ、沖縄自衛隊派兵ー沖縄軍事支配ー釣魚台領有に対決する闘いを、派兵前段直接攻撃ー5・15記念式典粉砕！として闘い抜かねばならない。

5・15記念式典を粉砕せよ！

五月一五日、日本の支配者階級は、日本武道館に天皇の出席のもとに、「返還記念式典」をおこなおうとしている。この式典こそ、日帝の沖縄軍事支配開始の式典であり、今後の沖縄への自衛隊派兵釣魚台領有、そしてアジアへの侵略反革命を新しい段階へ押し上げることの宣言の式典である。

この式典での天皇の「言葉」を現地沖縄の式場にカラー中継すべくマイクロ回線の突貫工事が行われたが、沖縄人民は、これが日帝の軍事支配開始の日であることを見抜き、この天皇の中継は、あの屋良でさえ拒否せざるを得なくなっている。

執行部の裏切りによって終息させられながらも、牧港支部やミルクプラント支部を中心に最後まで抵抗を続けた全軍労の労働者をはじめ、沖縄の労働者のなかに、自衛隊配備反対の声が 高まっている。

自衛隊派兵をめぐって、第二のゴザ暴動が起きる条件が形成されつつある。

日帝の軍事支配に対する拒否の気運が揚っている。

われわれは、日帝の沖縄軍事支配に対する現地の怒りに応えねばならない。

すべての労働者・学生・市民諸君！ われわれと共に、沖縄派兵自衛隊直接攻撃ー5・15記念式典粉砕闘争へ進撃せよ！

スローガン
★狂乱の反革命に対決し全人民的反撃を蜂起・世界革命戦争の旗の下に組織せよ！
★侵略派兵開始の五・一五を前段直撃で帝軍解体開始の日に転化せよ！
★日帝の沖縄軍事支配に対する現地の怒りを本土の前段直撃で派兵自衛隊に突き刺し根底的動揺に叩き込め！
★釣魚台の中国「労働者国家」帰属を認め、日帝の尖閣列島有領併合の策動を粉砕せよ！

スローガン
★狂乱の反革命に対決し全人民的反撃を蜂起・世界革命戦争の旗の下に組織せよ！
★侵略派兵開始の五・一五を前段直撃で帝軍解体開始の日に転化せよ！
★日帝の沖縄軍事支配に対する現地の怒りを本土の前段直撃で派兵自衛隊に突き刺し根底的動揺に叩き込め！
★釣魚台の中国「労働者国家」帰属を認め、日帝の「尖閣列島」領有併合の策動を粉砕せよ！

蜂起の定期購読を！
半年分　600円
1年分　1200円（郵送料共）
蜂起社03（446）0832．（振替）東京1512

獄中同志奪還の為の圧倒的カンパを

69年安保決戦の敗北を党の革命としてBUNDを不死鳥の如く国際階級闘争の最前線に蘇えらせてきた共産同蜂起派は、その成果の一切を賭し70年9月三里塚機動隊殲滅と10・21練馬第一師団直撃・占拠闘争と渋谷駅派出所への機動隊襲撃戦闘を貫徹した。共産主義を軍事に組織する攻撃的非合法党の建設を核心とし、「鉄の五大規律」で武装されたわが公然軍団は、正規軍の質を受けつぎ権力を正面白兵戦で撃ち砕き建軍のイデオロギーと機動隊どもの精心的支柱を根底から動揺せしめ、全世界人民のその武装闘争の闘いを世界革命戦争の戦列へ統合する大胆な烽火であるが故に、三里塚戦士と10・21闘争戦士に対する弾圧は気違いじみた長期勾留を強いた。権力の破防法攻撃は、我々を組織壊滅せんとし、我々は破防法にひるむことなく政治戦略と軍事戦略を貫徹する「党の為の闘い」と「党としての闘い」を階級闘争の只中で突き出した。我々に対する攻撃は蜂起・世界革命戦争派の武装闘争への直接的攻撃であり、返す刃で人民戦線派を切るだろうし、全人民に対する先行性ファシズムの狂乱の反革命の前ぶれである。我々は攻撃的非合法党の強化をさらに進め、獄中同志を奪還し、断乎として派兵前段直撃を貫徹するだろう。

今なお獄中にとらわれている同志奪還の為には、差入費用、弁護士費用、保釈金等々多額の費用が必要である。

同志諸君！「蜂起」愛読者諸君の巨額なカンパを訴える！

共産主義者同盟
弾圧対策委員会
宛先　渋谷区広尾5の16の1
北村第一ビル　蜂起社　気付

鉄の戦線
1号　三百円
2号　四百円
3号　四百円
全国書店で
好評発売中
蜂起社でも取扱います。

4・14集会報告

武装闘争を担い、支持する広大な人民の海を構築せよ！

東京大集会に労・農・学・市民九百名

4・14東京大集会は九段会館で九百名の圧倒的労・学・市民を集めて克ち取られたことを報告する。

新宿・渋谷等の主要ターミナルの街頭武装宣伝戦を貫徹し、更に四月十一日お茶の水駅頭で結集を呼びかけていったＡＩＦと保全共の部隊に対し、内部危機をますます深めて今や消滅寸前の日向派が姑息にも背後から鉄パイプで襲いかかってきた。しかしながら、我々は、この妨害を断乎粉砕し、十四日当日、最後の武装宣伝を再度お茶の水駅頭で貫徹するとともに明大、中大とお茶の水一帯を「蜂起」と「保全共」の旗を高々とかかげてデモンストレーションし、制圧した。日向派は、我がＡＩＦを先頭とした60名の赤ヘルの再度のお茶の水登場に度胆をぬき、明大本校に奥深くこそこそ逃げたまま、であった。

全階級戦線から反革命集団が一掃される日は間近い。日向派の末路に栄光あれ!!

保安処分全国共闘会議は、12・5結成大会のその地平を堅持しつつ、4・14集会で蜂起・戦争派潮流の深さと広さをはっきりと獲得した。

東京大集会は、定刻の5時半から、ＡＩＦと保全共のヘルメット部隊が会場前列をしめ、九百名の労・学・市民が立錐の余地なく埋めつくし開始された。

この間の保全共の運動を最も英雄的且つ献身的に担ってきた町田同志の司会により、主催者である保全共事務局長山本同志の本集会に対する内容が提出された後、浅田光輝氏の講演は、4・28破防法の適用から、三度に亘るその発動更に十月社－赤衛軍をめぐる、権力の河本記者の逮捕から朝日の報道の自主規制（解雇）また連合赤軍銃撃戦におけるプレスコードにふれ「現下の階級支配は、まさに革命党と全ての人民に向けられた破防法体制であること。又「国民の知る権利を守る集会」なる人民戦線派の集会は、「火災ビン法」案の与野党あげての推進ぶりを見ても、全くインチキであることを強調し、これを粉砕するのは、戦闘的労働者、学生・農民以外にはあり得ないだろう。我々と共に闘いぬきましょう」と力強く呼びかけ結集した部分に強い感銘を与えた。

続いて、破防法烏山裁判弁護士である樺島正法氏は、保安処分体制を中心に述べ、刑法改正の軸である保安処分と、又保安処分的なるものへの闘い－断種・ロボトミーを含めた「優生保護法」・「精神衛生法」・「留置規制」改悪を媒介とした「監獄法」等々の改悪に目を向け闘いぬかねばならないこと更に現在の精神衛生法体制下の精神病院の実体は「少年には「練監」、老人には「おば捨山」浮浪者には浮浪罪の刑務所・強制収容所である」ことを訴えたのである。

次に、昨年6月15日、保安処分に反対する決議や中田意見書廃棄の決議を採択してきた精神神経学会理事、保安処分に反対する委員会・委員長である中山宏太郎氏は刑事政策、治安対策としての保安処分の位置を明らかにし、現在の準備草案の問題点をあげた。保安処分の対象を提起する権力側の根拠が定かでないこと、予防拘禁制度において、精神障害者はそれを精神医学上判断されうるとしているが何の根拠もないこと、日共の御用学者等は、治療処分の条件である責了能力の点で、そうとうそれの限じているものなどの表現を用い、精神障害者を含めていること、保安処分に賛成している東大の秋本氏は、反対意見を政治的偏向者の言である等といっているが彼こそ保安処分推進者の急先鋒であることなどを暴露していったのである。

更に、赤レンガの闘いを担ってきた東大精神科医師連合の森山公夫氏は、医師だけのこれまでの闘い－自主管理闘争が－民青派看護婦の患者－看護の拒否、「看者」のそれへの抗議として発展していると述べた。

そして精神医療の歴史のなかで狂気は常にその時の支配階級の社会政策貧民政策労働政策の結果として存在してきたこと。モデル病院と言われた烏山病院の「生活療法」も現代の社会体制のなかであらゆる稼動力を引きだそうとする日帝の社会政策の一環であることを鋭く暴露しつつ、かかる長い「精神医療の歴史」があり「患者」の苦闘があるが故に安易な形で「患者」との共闘を語ることができないし、これを踏まえ多くの人々が東大赤レンガ闘争への支援を行ってくれることを要請したのである。

次に四次防予算の先取り、立川抜打ち移駐に鋭い批判を集中し、沖縄への装備品の秘密裡の輸送等－日帝の対外戦略を軍事面から暴露、批判してきた小山内宏氏は、四次防の内容と刑法改正の動向の関連を明らかにした。

「F4戦闘機や長距離ミサイル・ナイキの航空自衛隊関係や海上自衛隊また陸上自衛隊においても予算面のおもてむきの飛躍以上のものが、四次防によって進められている。その力は、三次防で既に世界第7位であるが故に、はかりしれない。これは日帝軍事力の戦略的転換なのである。そして外務省機密文書漏洩事件に対する機密保護法の制定の目論みは刑法改正－保安処分の道が、一方における軍事力の強化にともない「国家機密の保護」のために言論・思想統制を行い、刑法改正－保安処分の道につながっていくだろう」と警告を発し、圧倒的拍手を受けた。

次に精神医療を考える市民運動の高杉晋吾氏が烏山闘争の問題に触れ、支援のカンパを訴えた。

弁護士の内田剛弘氏は、大阪弁護士会で刑法全面改正作業と出された草案の反対意見を提出し、これを受けた日弁連の反対意見について述べた。そこではこの審議自体の①あらかじめ刑法改正を前提にしたすすめ方②その秘密主義・官僚主義、③重罪主義の傾向、④宣告猶予制、⑤保安処分などの問題点がとりあげられたのである。

講演の最後を哲学者である田中吉六氏が熱っぽく語った。氏のこの間の研究作業を深め、保安処分の思想がファシズムの入門であり、ファシズムとは帝国主義段階の予防反革命であること、質を量に還元する近代医学の体系と帝国主義段階の刑事政策が合流したもののこそ保安処分の思想的基盤を形づくるものであるということ。精・肉労働の統一が分業の発生、階級の発生、従って国家の登場以来分裂し、そして存在と当為の分裂がおこる。

資本制社会で労働力商品の形態を受けていくわけである。存在と当為を当為において統一するものこそ共産主義であり、階級闘争である。これが、階級社会の最高の完成形態である資本主義社会を止揚し、アダム・スミス的労働観－実は資本制社会の規定を受けたところの交換価値の側面からみた労働観・人間観を粉砕できる。マルクスは労働を自然と人間の矛盾・対立における－実践的媒介としてみた。そして疎外された労働を生む社会の根拠そのものと対決する存在と当為の統一としての共産主義・階級闘争で「マルクスの人間観で、破防法－保安処分と闘おう。狂乱の反革命に対決する全人民的反撃を組織せよ！」と終始力強く訴え、九段会館を埋めつくした労・学・市民の万雷の拍手と「意義なし」を受けたのである。

アピールは精神医全国共闘会議の宇都宮氏の力強い発言を受けた。この間のインターン闘争から医局解体闘争学会解体闘争の一定の成果を踏えつつ何故医療従事者との共闘が困難であるのかという問題を提起した。それを突破するには精神科医という労働の質をきびしく問いつめて労働運動と結合し全人民的課題を担うなかで解決されるだろうこと、刑法改正－保安処分の先頭で闘うことを宣言した。

次いで、奈良五条山共闘会議の闘争報告と決意、日本赤色救援会の破防法、保安処分と闘う決意及び塩見同志の獄中からのアピールが読みあげられた。

最後に破防法被告、仏同盟議長が「破防法、保安処分と闘うにはこれを一体としてとらえ何故権力総体がこれを提起し、権力の攻撃の環がどこにあるかを見定め闘わなければならない。

差別糾弾主体から運動のみを追求するならば、権力の意図がわからずバラバラな運動は解体されるだろう。

米中ソ三角均衡下の日帝の侵略・反革命は、5・15新らたな沖縄の軍事支配、「尖閣列島」領有として進行し、国内では、国益論・民族排外主義が人民戦線派を包摂している。この日帝の新らたな侵略・反革命の道は、武装闘争の噴出を封じこめ、解体し革命家を「闘争性狂信症」のもとに医療刑務所に叩きこむ狂乱の反革命、破防法体制下の保安処分として進行している。われわれは日帝の権力の政治的かつ軍事的重心である帝軍解体闘争に一切の運動をしぼりあげ、共産主義政治で武装闘争を、堅持しそれを支える人民の海をつくりださねばならない。「精神障害者」の差別・抑圧を断乎として粉砕し7年以上の刑に耐え、武装闘争のその最前線で闘おうと発言し、圧倒的「意義なし」を受けたのである。

3時間半に及ぶ講演とアッピールは山本事務局長の最期のまとめを受け終始熱気のうちに終了していった。

12・5保全共の結成大会を現下の階級闘争の三分解のなかで、その最前衛－蜂起・戦争派－の一翼へ登場せしめてきたわれわれの闘いは、各戦線－精神病院「患者」家族・大学・弁護士・哲学者・弾圧戦線等の輪を拡大し2・26、27、28闘争～3・27～4・4法政審総会粉砕闘争から東京大集会を経て文字通り、現下の権力の攻撃の質を粉砕できるのが、われわれ蜂起・戦争派の潮流以外にないことを本集会は突きだしたのだ。4・28 5・15闘争へ総力をあげ驀進しよう！ 武装闘争を担い、支持する広大な人民の海を更に拡大せよ！

倉田君へのあらゆる援助に感謝する

破防法弾圧と闘う会

破弾闘の会員、支える会事務局員倉田豊寛君が、日向反革命集団のテロにより、瀕死の重傷を負ってから、すでに5ヶ月が過ぎ、同君がいまだに不十分ではあるが一程々度の回復を得た現在、破弾闘は、その回復のために、あらゆる援助をおしみなく寄せて下さった方々に、深く感謝の意を表したいと考えます。

昨年12月2日午後10時ごろ、水道橋駅付近路上で、倉田君はその任務遂行中に背後から日向一派の襲撃を受け、日大病院に救急入院しました。病名は、頭蓋骨陥没骨折、硬膜外血腫であり、入院時すでに意識は消失し、発見が遅れれば死亡は必至であると考えられました。

深夜の開頭手術が施行され、以後3週間意識は回復せず、肺炎と脊髄膜炎という合併症の併発を招き、高熱と痙攣発作に悩ませ続けられた、まさにその生命は死の一歩手前でありました。その間、急をききかけつけて下さった方、破弾闘会員と当然ながら共産同蜂起派の諸同志の24時間闘病院詰めの介抱、なによりも、同君の生へのそして、革命への情念により、12月末に意識の回復をみたのであります。

しかしながら、新年を迎えても自立歩行出来る状態でなく、諸同志の介助を必要としていました。一月末になり、合併症の危険も去り、一応の脳外科的治療の終了を迎え、言語、歩行等の訓練、リハビリテーションのために、都立広尾病院に転院した。頭部外傷後の機能訓練は、医学的にも、現在の医療体制においても、全く不十分であり、多大の困難性を持つのであります。が、同君の機能回復への努力と、同君のために、歩行、食事、入浴、その他洗濯までを含めた蜂起派同志の介助、更に、広尾病院の医師の献身により、歩行をはじめとする自己の生活上の諸動作がかなり獲得されました。受傷時の脳挫傷の程度を考えれば、奇跡とも考えられる状態であり、これは、不十分な我破弾闘の活動を上まわる諸氏の援助を強く感ずるものであります。

しかし、社会復帰はまだ無理であり、一部の言語障害、歩行障害を残し退院し、現在もなお失われた機能の回復に励んでおります。

広尾病院の主治医は、「この様な頭部への重度損傷に於て、倉田君の回復程度は奇跡的です。早期手術の結果もさることながら、重要なのは、術後の同君自身の努力と、その機能訓練などに献身的介助を行った人々の力です」、と語り、更に、失われた機能の回復には長期間の訓練が必要である事を付け加えました。

我、破弾闘は、倉田君に寄せられた多くの方々の救援に対し、感謝の意を表わすと同時に、倉田君を襲い、同君から多くの機能を奪い、破防法戦線、階級闘争からの一程の後退を余儀なくさせた、日向反革命集団を、再度、満身の怒りを込めて弾劾しなくてはなりません。昨秋闘争において、自己の権力闘争を貫徹し得なかった彼等は、権力との闘いを放棄し、権力と闘う者そのものに敵対する関係になったのであります。同時に、第二次ブント分裂以来、自己の組織的崩壊を党派闘争によって、延命を計ろうとする日向派の、その無原則性故に、彼等の事務局員が事務局から追放された事実も明らかにせねばなりません。破防法弾圧に対する対権力の共同防衛の任務を放棄し、破防法戦線からの脱走という日和見性の、その裏返しとして、具体的に、最も狙い易い事務局員倉田君へのテロとなったと考えます。更に日向派の機関紙は言外に、襲撃の成功をにおわせその成果を誇らしげに宣伝している始末でありました。日向一派によって倉田君が如何なる位置付けをされていようとも、すくなくとも、階級闘争における共同防衛の任務として破防法事務局任務中の倉田君を襲ったことは許されません。われわれはかかる反革命行為を、最もよく闘う者への「後方からの狙撃」として、我、破弾闘への敵対であるばかりでなく、支える会世話人、事務局の方々の声明において明らかの如く、破防法弾圧に抗し結集する全ての部分への敵対であると考え、彼等を糾弾し全破防法戦線からの放逐を更に強く決意するものであります。

沖縄派兵を目前にした権力の、反革命、弾圧の嵐が吹きあれている今、反弾圧戦線の更なる強化がわれわれに問われています。反弾圧戦線の構築に当って、倉田君へのかかる事態を十二分に総括しなければならないと考えます。

倉田君受傷を知ると同時に、日向反革命集団の弾劾と同君への援助を声明し、多額のカンパを寄せて下さった、浅田先生を始めとする支える会世話人、事務局員諸氏更に同君に対する一律カンパを決定して下さった井上弁護団長、4・28破防法統一弁護団の諸先生、また、破防法戦線のみならずあらゆる方々の、物心両面の救援に、蜂起紙上を借り、心から感謝致します。

また今後も長期に亘る倉田君の機能回復訓練のため同君への強力を強く訴えます。

破防法弾圧と闘う会

同志の皆さん元気ですか！

私は現在〇〇〇〇〇〇病院に入院しています。

毎朝夕注射をし薬をたくさん飲まされていいかげんへいこうしています。ここはちゅうふうの病院ですが、一応リハビリの専門病院ですのでがんばって療養しています。

まだ手に力がつかず足も足片のビッコがなおりません。

まったくいやになります。

そちらは4月を迎えていろいろいそがしいことでしょう。今はなんにもできませんがまあニュースでも聞きながら楽しみにしています。

字を書くのもなかなか書けずこの辺でやめます。

乱筆にてあしからず

倉田豊寛

（この文章は破弾闘宛に送られたものを掲載したものです。倉田同志の強靭な革命への情念が今だ不充分とはいえ、奇跡的な回復をもたらしていることを心から喜び、更に一刻も早く戦線に復帰されることを願ってやみません）

4・10

派兵直撃の布陣打ち固める

東京叛軍行動委

全部・全国で5・15沖縄「返還」日を日本帝国主義権力による新たな侵略・反革命の開始の日とし、自衛隊の沖縄派兵阻止を目指して叛軍闘争を闘い抜いている同志諸君！

4・10東京叛軍行動委員会の主催による「映画と講演集会」が、午後六時千駄ヶ谷区民会館において首都の労働者、学生、市民八十名の結集によって熱気のうちに獲ち取られたことを報告したいと思います。

まず、蜂起戦争派東京叛軍の同志から「3・15沖縄「返還」協定の批准書交換をおこなった日米両帝国主義は、5・15の「返還」式典に向って、ひたすら前進している。そして今や、沖縄「返還」の本質が自衛隊の沖縄派兵にあることが、誰の目にも明らかになりつつある。日帝の侵略・反革命戦争に向けた独自の戦略は、四次防－自衛隊沖縄派兵を貫徹し、日「韓」台を射程に収め得る軍事力の確立であり、文字通り極東－東南アジアにおける侵略反革命体制の構築である。四次防においては、沖縄派兵を媒介としてナショナリズムを育成し、国民と軍とを貫くイデオロギー的結集軸の確立が目指されている。魂の抜けた軍隊で、国際的な侵略反革命と自国内部に向けた反革命を統合しようとしている。この帝軍自衛隊の弱さをも日帝は沖縄派兵を突破口とし埋めんとしているのだ。国民的合意を受けていない自衛隊の姿は3・7立川への抜打ち自衛隊強行移駐が何よりも物語っている。

ここにこそ一貫して主張し続けてきた自衛隊沖縄派兵前段直接攻撃の戦略的な根拠が存在するのだ。

われわれは、四～六月闘争を日帝の常備体制確立に向けた自衛隊派兵粉砕として、反革命武装勢力との対決を軸として闘い抜かなければならない。

社共人民戦線派の議会主義の破産を暴露し、宮下、明治派の一国主義－経済主義－大衆運動主義を粉砕し、真赤な蜂起－戦争派叛軍の下に結集しよう！

われわれは連合赤軍に銃撃戦を契機にした新たな密集した反革命弾圧の嵐をはねのけ、蜂起－戦争派潮流を大胆に形成し、内戦－世界革命戦争を闘いとろう！全ての力を派兵阻止前段直撃へ傾注せよ！」との力強い決意を受けた。

それに続いて、60年代の階級闘争の一つの高揚を創り出し、今なお不屈の闘いを続けている三里塚軍事空港粉砕の闘いの中心軸反対同盟による測量阻止を描いた小川プロ映画の上映の後、基地解体闘争の先駆者内灘闘争に続く56年第一次砂川闘争以降、一貫して闘いの最先端を担ってきた、砂川基地反対同盟副委員長宮岡政雄氏の講演が行れた。氏は「去る、3・7立川への自衛隊抜打ち強行移駐は砂川住民の反対行動に恐れをなした政府支配者階級の暴挙であり、絶対に許すことができない。また沖縄現地の土地再契約拒否！公用地暫定使用法粉砕！の闘いと固く結合し、本土立川でも土地再契約拒否の闘いと本隊移駐阻止の闘いを最後まで貫徹し、現下の武装闘争と連帯を深めていこう」との発言には会場からの万雷の拍手を浴びていた。宮岡氏の講演を裏打ちするかのように、「流血の砂川」の全学連の果敢な闘いが映し出されていった。

最後に、68年10・21防衛庁闘争の画像が映し出されるや、会場からは「異議なし」の連呼。中大中庭における集会から、丸太棒をかついでの突撃隊の防衛庁への進撃は、輝かしいブンド魂を生々と再現していった。なぜなら中核派の大衆の自然発生に拝跪した新宿騒乱に比して、権力実体攻撃として国際主義の旗を高々と掲げた闘いだったから。

全戦線を牽引し、派兵阻止前段直撃闘争への総決起を固く意志統一して集会は終了していった。

4・13

言論・思想弾圧と闘う講演集会報告

狂乱の反革命に総反撃を

破防法裁判闘争を支える会主催による「言論・思想弾圧と闘う講演集会」が久保講堂に一八〇〇余名を結集して勝ち取られた。

日帝先ファ権力による攻撃は、沖縄軍事支配を目前にして狂乱の反革命として吹き荒れている。とりわけわれわれ蜂起戦争派に対する組織破防法体制は、プロ独派壊滅を何が何でも押し進めようとする権力の攻撃である。連合赤軍事件を頂点としたブルジョアジーの攻撃は、「法と秩序」の枠に市民社会を反動的に固定化するものとして、「暴力とドロボウ」のもち出しから、保安処分攻撃＝共産主義者は狂人であるというようなフレームアップとなっている。それは報道等のブルジョアジャーナリズムを十分利用し（リンチ事件の死体を見たものは報道関係者の中で一人もいない。－発言－）デマとデッチアゲを行なっているのである。

これは先ファ権力の攻撃の質が新たな反革命攻撃に転化しはじめようとしているのだ。

日帝は沖縄への自衛隊派兵から「尖閣列島」（釣魚台）領有を目論んでいる。そして派兵をめぐってのあらゆる事態は、軍と国民を貫くイデオロギー的な軸がいまだ確立されていないことを示しているのであるが、「天皇イデオロギー」のもち出しによりファナスティックに戦争にかり立てる軸を形成しようとしている。それは日帝自身が旧来の日米安保の枠内での軍事外交路線ではなく、米帝の中国外交が大きく転換し、従来の共同反革命の利害にも亀裂を生じている現在、新たな路線をソ連接近からバングラディシュ承認等に見られる中国牽制外交として展開しているのである。沖縄軍事支配から「尖閣列島」領有の策動を「釣魚台は中国人のものである」「先進国人民の闘いは遅れている」等から問題を立てるのは誤りである。われわれはそのような一国主義、民族主義とは無縁である。過渡期世界の革命的国際主義の内実、世界革命戦争－世界プロ独の基準により「国益防衛」「民族排外主義」と対決しなければならないのだ。先進国武装闘争を支える広大な人民の海を形成し、権力を逆包囲せよ！ 破防法－保安処分体制を粉砕せよ！

私書箱中止のお知らせ

私書箱96号は都合により中止しました。以後我同盟の連絡先は左記のところにお願いします。

渋谷区広尾5の16の1　北村第一ビル内
蜂　起　社
電話〇三（四四六）〇八三二
振替東京一五一二二

沖縄派兵を直撃せよ

獄中からのアピール

練馬（直撃占拠）闘争の成果を先武闘の爆発へ

和田昌暢

第五インター・世界プロ独をめざして闘い抜いているすべての武闘派の諸君！

とりわけ派兵部隊直撃に決起せんとするすべての戦士諸君！

歪められた現代過渡期世界が、『武闘派』中共をまきこみつつ、米・中・ソ三角核均衡体制へと確立せんとしている。しかし、命知らずの後進国革命戦争派を頂点とした全世界の武闘派は、世界プロ独めざして反革命軍事に対決している。

下部構造の不均等発展と後進国革命戦争により、フラフラになった米帝は、中共の平和共存政策を媒介として、三角核均衡体制を確立した。しかし、先進国プロ独派は、後進国革命戦争派と連帯して必ずや、内戦＝世界革命戦争－世界同時革命をかちとるであろう。

沖縄を巡る階級攻防が明らかに日帝の軍事戦略を巡って展開されており、いまだ建軍イデオロギーなき帝国主義軍隊＝自衛隊の派兵部隊を恐怖のドン底にたたきこむことである。しかし、国民統合の軸がない日帝は、独占主流－行政軍事官僚を中心に、新たな権力再編をかけてきている。つまり、60年代プロ独派を分解せしめ、アンチ武闘派を人民戦線左派あるいは反革命集団へ集約し、武闘派には破防法をはじめとし、重罪適用をもって包囲し壊めつせんとしている。この過程で、連合赤軍問題がでてくるのである。従来の法と秩序のわくからもう一歩進んで侵略反革命にむけた治安体制がしかれている。

封じこめられた軍事の壁の前で敗北させられたわがブントは熾烈な党内－分派闘争の中で再度「共産主義」をとらえかえさなければならなかった。つまり共産主義と軍事の統一が世界党として獲得しなければならないこと、共産主義の実践主体たる世界党が軍事に裏打ちされて綱領を確立しなければならない。軍事のない共産主義は虚構であり、共産主義のない軍事はマンガである。栄光ある公然軍団の軍事を担った者として高らかにわが党派に結集せんことを呼びかける。先ファ権力の更なる攻撃による階級分解の促進によって一国主義者、ソビエト物神派、即時的軍事派が混迷する中今こそブントイズムをたからかにしなければならない。

地下正規軍、公然軍団の総力をあげ帝国主義軍隊解体に向け先進国武装闘争に勝利せよ

志し半ばにして逝った連合赤軍の諸氏の冥福を祈りながら諸君の多大なる戦果を獄中より期してペンをおきます。

諸党派の破産を止揚し自衛隊を叩きつぶせ！

佐瀬英三

蜂起・世界革命戦争の旗の下に結集された同志諸君!! 突撃せよ！ 突撃せよ！ 連合赤軍の諸君によって成された一連の事態に対して、「蜂起妄想集団」などといい出した革マル派は論外として、急に口にチャックをしてしまい、一時騒ぎたてた「爆弾の時代である」などの見解もどこへやら静かになってしまった革命的共産主義者(?)＝中核派、銃撃戦支持を持ち出しつつも「リンチ事件」により回れ右をしてしまい、自己の醜さを露にしてしまった政治的利用主義者＝日向某、六回大会主義者＝怒濤派、突然いなくなってしまった進歩的(?)知識人、他方××派は爆弾を×個投げたのに、〇〇派は〇個しか投げていないと、現象面においてのみしか闘いを評価し切れない諸君。現在われわれに問われているのは唯一つ、誰に銃を向けるのか＝戦略の明確化である。つきつめていえば、われわれがいかなる綱領－戦略－戦術に基いて銃撃戦を、爆弾破壊戦を担い、そして死んでいくのかということである。現象面においてしか闘いを評価し切れない諸君ほ革命的でありつつも、権力の弾圧に、7年以上の実刑に、死刑に自ら突き進んで行くことが出来るだろうか。

これが一九七二年四・二八の現状である。

七一年四・二八清水谷三派集会はよりリアルな実践を担うべく、全社会的に登場し、数多くの武装闘争を展開し、これを公然と軍事的、政治的に展開する蜂起・反帝戦線・叛軍行動委員会は明治G、宮下Gを凌駕しつつ9・16三里塚白兵戦を、10・21練馬第一師団渋谷派出所を直撃し、宮下公園に蜂起戦争派の内実を独自で軍事的に貫徹、以降、11・14秋期武装闘争貫徹、12・5保安処分粉砕全国共闘会議結成大会2・26 27 28保全共全国闘争、3・18破弾闘集会、4・10叛軍、4・14保全共の東京大集会と大きなうねりをもって突き進んできたのです。

攻撃的非合法党建設を共産主義と軍事の内実から把え返し、現代過渡期世界における先進国武装闘争の貫徹形態としてわれわれの闘いが存在したのであり、闘い抜いた姿が今日のわれわれであることをふまえるべきです。

そうであるが故にわが蜂起派の闘いは、帝国主義の侵略・反革命を内戦＝世界革命戦争に転化すべく先行性ファシズム権力の物理的実体である軍隊＝自衛隊・機動隊を〝重心攻撃〟としてたたきつぶすことです。同時に、先ファ権力の一連の弾圧、とりわけ連合赤軍以降、吹き荒ぶ地域社会に対する管理制度の強化、通報体制の確立刑法改悪に見られる保安処分等々新らたな弾圧攻撃の質に対して、われわれが逆に先ファ権力を反革命分子を政治的に包囲し、軍事的に叩きつぶすことです。計画された戦術の下に確実に闘いを実践して行くことです。失敗は許されません。失敗はわれわれに生きることも死ぬことも許しません。同志諸君!! 残念な事ながらわが蜂起・世界革命戦争派の中に、一時、白色にウインクしたと思ったら、今度は青色にウインクしている部分が存在していると聞きました。彼等は右目・左目と色が異なっており、自己の位置がはっきりしていないようです。同志諸君!! 今すぐこの様な夢遊病者には目を覚さしてあげて下さい。最後に、現代過渡期世界に規制されつつもベトナム人民は米中ソ三角核均衡体制を粉砕すべく決起し、全世界に新らたな闘いを要請しています。われわれはこれに答えねばなりません。いや先進国武装闘争として彼等に答えられるのは第5インター・世界党であるわれわれを除いては存在しないのです。

同志諸君!! 突撃せよ！ 突撃せよ！

プロレタリア国際主義掲げ、帝軍を解体せよ

西原孝信

吹き荒れる反革命の嵐の中で、ひるむことなく革命に対する情念を燃し続ける全ての同志のみなさん、友人のみなさんに固い連帯のアピールをおくります。

沖縄闘争が「返還粉砕か奪還か」として位置していたのではなく、沖縄への自衛隊派兵、それにともなう侵略・反革命前線基地としての基地の強化・拡大が最大の問題点であったことは今春さらに明確になってきていると思います。

日帝は自らの政治的、経済的、軍事的力量を背景に日米安保同盟のワク内ではあれ東南アジアに向けた侵略・反革命戦争をなさんとしているのである。だからこそ、四次防においては、F4EJファントム戦闘爆撃機、P2J対潜哨戒機・保有艦船のおおはばな増大というように攻撃力の強化・攻撃範囲の拡大を主要目的としているのだ。69年日米共同声明では台湾・「韓国」の安全は日本の安全にとって緊急かつ重要であるという発言から最近ではマラッカ海峡の防衛範囲なるものは日本の生命線であるという発言にまで到っているし、日帝の防衛範囲なるものは沖縄返還をもって一挙にアジア、太平洋圏全域に広がるのである。沖縄への自衛隊派兵が沖縄の治安出動部隊であると同時に海外派兵の第一歩としてあることは明確である。災害援助を名目とした台湾韓国への国連軍の派兵は公然の秘密になっている。また立川への強行移駐、物資の先取り輸送、衣笠幕僚長のサイゴン訪問と日帝は急速度で帝国主義としての野望をとげんと体制を立てなおしている。闘う党、軍、人民に対しては破防法、保安処分攻撃、長期拘留、抹殺と反革命攻撃がかけられてきているし、国民を反共ナショナリズムの元に包摂すべく、郷土警備連帯、自警団の建設、民間右翼の育成、排外主義イデオロギーの流布等々とやっきになっている。このように日帝の軍事外交路線－侵略 反革命 体制は沖縄返還をメルクマールとして着々と強化されている。

沖縄闘争は特殊沖縄問題としてあるのではなく、帝国主義との総体的対決、革命と反革命の激突として闘われるであろう。また革命党派にとってはプロレタリア国際主義の内実を問う闘いでもある。70年代階級闘争は大衆運動の延長としての大衆武装闘争としては闘うことができない状態に主観的にも客観的にもなってきている。

日帝との闘いは勝利か死かといった二者択一的状態に入りつつある。しかし政治なき軍事主義が、綱領的内実を一切問わない一般的な武器の統一（戦線）といったものが権力の前にどのような敗北をもたらしたか明々白々としている。過渡期世界の帝国主義権力が戦時を平時によびこみ侵略、反革命戦争を成しとげようとするとき党・軍は人民から孤立することなく先行性ファシズムの権力の革命党・人民に対する圧殺的攻撃を粉砕し、自衛隊・帝国主義軍隊解体・基地解体といった叛軍闘争と機動遊撃戦を党における統一として成し遂げなければならない。

我々はプロレタリア国際主義の旗を高々とかかげ、帝国主義軍隊解体・帝国主義の侵略・反革命を内戦＝世界革命戦争に転化すべく自衛隊の沖縄派兵阻止に決起しようではありませんか!! 沖縄への自衛隊派兵阻止!! 帝軍解体!!

打ち砕け、鉄格子

保安処分粉砕全国共闘会議・刊
B5　130P
定価　350円

主要内容

▼発刊にあたって……山本康夫
▼メッセージ
▽破防法被告・仏徳二▽破防法被告・久保井拓三▽破防法裁判を支える会・浅田光輝▽弁護士立命館教授・佐伯千仭▽京大精神科評議会・中山宏太郎
▼主張　刑法改正－保安処分新設を粉砕せよ
▼報告編
▽関口進氏遺稿▽烏山・五条山・碧水荘闘争他▽関西共闘会議結成宣言▽精神衛生大会・十全デモ他▽精神神経学会声明▽刑法学会・犯罪学会闘争他▽「戦旗」「蜂起」「烽火」論文他
▼資料編
▽刑法改正解説▽刑法改正理由書▽刑法第二次参考案▽精神衛生法他

訂正とお詫び　全国共闘事務局
本文12Pに「昨年沖縄闘争に於ける革命的翼＝鉄の戦線、全国委、革共同中核派、日和見的翼＝宮下三派及び統一赤軍の新左翼三極分解は」とあるのは「昨春から秋にかけての沖縄闘争における蜂起戦争派・明治二派・宮下四派という新左翼の三つの潮流の分極」の誤りです。お詫びして訂正します。

蜂起社でも取扱います
TEL（四四六）〇八三二振替（東京）一五一二二